

---

k

.黒鬼風斗

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

k

### 【ZINE】

Z9024M

### 【作者名】

・黒鬼風斗

### 【あらすじ】

「悪魔の使者」と罵られる一匹の黒猫。クリスマスの日に彼が出会ったのは一人の若者だった。同情なんか嫌いだという黒猫の気持ちを余所に、若者は半ば強引に自分の家に連れ帰る。そこから暫く、奇妙な同居生活を送ることになるのだが……。

BUMP OF CHICKENの名曲、「k」をイメージして書いたものです。原曲の歌詞では悲しい終わりですが、本作ではハッピーハンドに挑戦しました。オリジナル的な小説なので、皆さんお気軽にお読み下さいませ。

## 第一部 冬「HOLY NIGHT」

雪が降っている。

無邪気にはしゃぐ子供の声も、夜になるとあまり聞こえなくなつた。

その代わりに、二人組みの男女が街中を歩き始める。

“クリスマス”という名の、何かの行事らしい。

……まあ、俺には関係ない話だ。

俺は振り返ると、再び裏路地の闇の中へと身を投じた。

k

♪ハッピーハンドver. ♪

from BUMP OF CHICKEN

Written by 黒鬼風斗

「さやつ、黒猫！」

「シッシッ、ここはお前の来るとこじやね。どつかに行かねエと  
ぶつとばすぞ！..」

それはこっちの台詞だ、と俺は不満を表現するために尻尾を振つた。“ここ”はお前らが来るところじゃない、“ここ”は俺のような嫌われ者が宿とする場所なんだ。

俺は少しの間そのまま二人の男女を睨みつけていたが、男の方がいきなり石を投げて来やがつたんとおりあえずそれを難なく避けると、フ と牙を剥いてやつた。

「ケツ、『悪魔の使者』が」

そう呼ばれるのも悪くない、と今ではすっかり開き直つている。そう罵声を上げた男の首からは、ドクロのペンダントがぶら下がつていた。……俺には理解できない。“悪魔の使者”である俺は罵るクセに、“死神”とかは大歓迎なのか？

まあ、人間のする事言う事なんて、別に理解したくもないが。俺は仕方なく新しい宿を探すために、その場を後にした。

裏路地はそういう奴らで一杯だつた。暗いから、人があまり来ないからと云つて、イチャイチャする“バカツブル”が行く所行く所現れやがる。しかも、今度はセックス中と来たもんだ。いい加減、

頭にくる。

俺は勢い良く駆け、丸出しの男の尻を思いつきり引っかくと、そのまま走り去つた。男の汚い逸物でも良かつたのだが、俺の自慢の爪がそんな血に汚れるのは御免だつたから、やめといった。後ろの方で男の絶叫が聞こえる。フン、良い気味だ。

そんなこんなで、俺は表通りにまで出てきた。眩しいくらい、夜とは思えないくらいに明るかつた。今夜は裏路地で夜を明かす事は出来ないから仕方なく、“外の世界”で寝床を探すのだ。好きで、こんな場所に来るもんか。

「……見て見て、黒猫よ」

「ホントだー。不吉ね、今日は一年に一回しかないクリスマスなのに」

予想通り、人間とすれ違う度に罵声が飛び交う。石が飛んでこないだけマシだと、俺はまた開き直つていた。

行く宛てもなく、どれくらいの間歩き続けたんだろう。人混みも段々と少なくなり、俺に石をぶつけて来る奴も出てきた。さつき投げられた石は脇腹のあたりに直撃した。投げてくる大半の奴は子供だ。と言つても、俺の言つ“子供”は見た目通り幼いが、もしくは見た目通り阿呆な人間の事だ。そう考えると、俺が今まで出会つた事のある“大人”は、なんて少ないんだろう……。

ドン、と人間の足が俺の脇腹あたりにぶつかつた。石に当てられた所だつたから、ズキンと痛む。わざと蹴つた訳じやないらしく、それ自体の威力は大した事ではなかつた。

「あつ、ゴメンね。大丈夫？」

とりあえず、俺は驚いた。俺に謝罪をする奴なんて初めてだつたし、そのまま俺を抱き上げるなんて、どこまでお人好しなんだろう。

若い男だった。脇にスケッチブックとペン入れを挟んでいた。  
「血が出てるっ！？」 まさか、僕のせい！？」  
「絵描きか？」

阿呆、んな訳ないだろ。どこの世界に、足に軽くぶつかったくら  
いで出血する猫がいる。

「ね、家に来なよ。傷の手当くらいならしてあげるからさ」

余計なお世話だ。「う、さっさと俺を放せ。  
俺はその暖かい手から逃れようと何度も身を捩つてみたが、そい  
つはなかなか放してくれなかつた。

「暴れないでよ。別に取つて喰おうなんて考えてないよ」

もし考えてたら返り討ちにしてやる。

「……キミも、一人ぼっちなんだね。僕も一人ぼっちなんだ。僕ら、  
良く似てるね」

その言葉に、俺は人間に甘えようとしている自分に気付いた。我  
に返つた、という感じだ。

俺はそいつの手に鋭い歯で噛み付いた。手加減なんてしてない、  
本気だつた。

そいつは「痛っ！」と声を上げて俺を解放する。俺はそいつの顔  
を最後に引っ搔こうとしたが、思いどどまつてそのまま裏路地の方  
へ走つた。

同情が、大嫌いだつた。同情なんてモノは、他人に自分を良く見  
せるための一つの手段だと俺は解釈してる。本当の優しさを以つて

同情する奴なんか、俺は今まで見た事もない。

俺は裏路地を走った。走つて、走つて……。やがて、街灯だけが寂しく照らしている場所に辿り着いた。人の気配もなく、静かな場所だった。

「捕まえたっ！」

油断してたところに、また暖かい手が俺を抱き上げた。俺にしてみればそこそこの距離も、人間の足にしてみれば短いはず。けどそいつはずいぶんと運動不足、または身体が強くないらしく、たつたこれだけの運動で息を切らしていた。

「……つたくも、逃げないでよ。同情が嫌いなんだね」

たつたあれだけの事で俺の心理を見抜くとは、只者じゃないかもしれないと俺は思った。

俺は多少なりもがき、尻尾を振つて不満を訴えたが、そいつはもう一度と手放すかつてくらいに強く俺を抱きしめていた。それこそ、一步間違えば俺の骨が折れるんじやないかと思うくらいだ。

「とりあえず、傷の手当をしなくちゃね」

そいつはやけに楽しそうに笑つた。その笑顔に、どういづ訳か俺の高ぶつた胸の鼓動が小さくなつた気がした。

……手当をしてもらつたら、俺はすぐに出て行くからな。そつ鳴くと、俺はその腕の中で目を閉じた。

暖かいな……。暖か過ぎて、なんだか火傷しそうだ。

そいつはまた、クスッと笑つた。

## 第一部 春 「絵描きと黒猫」

### 2・春 「絵描きと黒猫」

俺は黒猫。世間に言わせりや“悪魔の使者”らしい。そんな訳で、この世に生を受けてから石を投げられたり、罵声を浴びせられたり、蹴られたりでなかなか大変な人（猫）生を送っていた。他猫との馴れ合いも嫌いだつたから、俺を慰めてくれる奴もいなかつた。

俺はいつも一匹だつた。孤独には慣れていたし、むしろ望んでもいた。だが今は、俺の“飼い主”と呼ぶべきかもしれない変わり者が一緒にいる。

「お～い、朝御飯だよ。」

時々、どうしてだろうと疑問に思う事がある。どうして、俺はコイツと暮らしているのだろう、と。

初めて出会つたクリスマスの夜、俺は流れに身を任せてこの家にやつて來た。家賃はいくらだろうと本気で考えてしまひよつな、ボロニアパートだ。まあその話は置いといて、俺は傷の手当をえしてもらつたらさつと家を出て行くつもつだつた。……そう、そのつもりだつた。

初めて人の暖かさに触れた気がした。それに、そいつは「もし良かつたら絵のモデルになつてくれないか？」とも言つた。猫はすぐ恩を忘れる、と世間では言つてゐるらしいが、実際はそうじやない。ただ、面倒で恩を返さないだけだ。俺も、例外じやなかつた筈だつた。

「早く来ないと僕が食べちゃうよ。」

多分、それは冗談で言つてゐるのではなく、本気だと思つ。そいつは卖れない絵描きで、本当に貧乏だった。栄養失調の如く、肌の色は悪いし、手なんて骨に皮がついているだけのようなモンだ。そいつは自分の食事を減らしてまで、俺に饭を分けてくれる。これにはさすがに恩を返さずにはいられなかつた。

俺は「すぐ行く」と鳴くと、そいつの声がする台所の方へと駆けた。

もちろん、俺がここにいるせいでそいつの生活が更に苦しくなるつて事も考えた。猫とは言え、三度の饭などなど色々と金が掛かる。だが、もしそいつの描いた俺の絵が卖れれば、生活が楽になるんじやないかとも思つた訳だ。卖れるとは分からぬ。卖れないだらう、とこゝのが俺の本音だ。

それで、俺は未だに出しつぱなしの炬燵の上でじつと動かないで耐えていた。

「動くなよー……」

分かつてゐるや。

と言つても、どうしても動かすにいられないのが猫だ。気付いたら、前足で顔を洗つていた。

そいつは一瞬だけ眉を顰めた。が、俺がすぐに元のポーズを取ると何も言わなかつた。

「出来たつー」

数分後に声を上げ、そいつはスケッチブックとペンを片手に、後ろに寝転がった。

出来たのかい？ どれどれ、俺にも見せてくれよ。

俺は炬燵から飛び降りると、そいつの腹の上に着地（短い悲鳴を上げたが無視）して、そのままスケッチブックへと歩み寄った。

「見たいのかい？ あんまり似てないからも知れないけどさ」

そいつはスケッチブックを俺に向けた。ラフ画が、紙一杯に描かれていた。

最近、自分の姿を鏡で見ていないから何とも言えないが、描かれたそれは確かに黒猫だつた。眺めの少し荒い毛並、脇腹辺りの傷、鋭い目付き、なかなか細かいところまで描いてくれてるじゃないか。俺は喉をぐるぐると盛大に鳴らし、感謝の意を示した。

「どういたしまして、ホーリーナイト」

そいつは、本当に嬉しそうに笑っていた。

“ホーリーナイト”というのが、どうやらこの俺の名前らしい。名無しというのも不便だったからその名前を付ける時に俺は何も言わなかつたが、今にして思うと微妙なネーミングセンスだ。“聖なる夜”に出会つたからとか何とか言つてたから、そういう意味なんだろうか。

しかし、“ホーリーナイト”つて呼び辛くないか？ しかも頑張つてもこの長いのを略す事は難しいだろ。“ホーリー”？ “ナイト”？ “ホナ”？ ……ええい、まだるつこしい…

「あ！ そのポーズいいね。ちょっと描かせてよ」

人間で言つ“考え中”というポーズをしていたらしい、どうやら。

まあ、確かに考え中だつたんだけど。

そいつはまたスケッチブックとペンを持つと、目の色を変えて俺を見た。

……で？ また俺はこのポーズのまま静止？ このポーズで静止なんて、かなりキツいんだけど、ねえ？

「動かないでね」

無茶言つな。

俺は一つ、大きな欠伸をかました。

## 第二部 夏 「炎天の下で」

### 3・夏 「炎天の下で」

俺も随分と器用な事ができるようになつたモノだと、自分で驚いている。

片方の前足で身体を支え、もう片方の足でスケッチブックのページを捲る。次のページへ行つても、俺のしか描かれていない。つまり、殆ど真っ黒だった。次のページ同じように捲つてみる。やはり、同じ光景が広がっていた。

別に出来るようになつたのはこれだけじゃない。ドアの開け閉めだって出来る。閉めるのは簡単だが、開けるのが一苦労だ。ドアノブの上に飛び乗つて、落つこちないように注意しながらノブを回す。そのままゆっくりとドアに体重を掛けてやるんだ。そしたら、一、二、三回挑戦してやつと開く。

「あ、コラ、勝手に見るなつて！」

「そいつが慌ててやつて来て、俺からスケッチブックを奪うよつて取ると、大事そうに胸に抱えた。いいじゃないか、少しくらい。けち。

「別にこの絵は売るつもりはないけど、せっかく描いた絵だからね。そんな事はしないと思つけど、破られたりしたらショックだから」

失礼な。破いたりするもんか。あんたがせつからく描いてくれた俺は、どうしてモデルの俺が破ける？ 俺を描いてくれた事、結構有り難く思つてるんだぜ。

そいつはスケッチブックをまだ出しつぱなしの炬燵の上に置くと、

奥の部屋に消えていった。かと思うと、すぐに出てきた。帽子を被り、脇にスケッチブックの紙一枚がすっぽり入ってしまう程の大きさの封筒を挟んでいた。

「行くよ、ホーリーナイト」

行くつて、何処へ？

その質問に答えずに、そいつは俺の目の前にドンドンバスケットを置いた。猫くらいの大きさなら入れるくらいのサイズだった。嫌な予感がした。それを裏付けるかのように、そいつの手がゆっくりと迫つて来た。

……おい、ちょっと待つた。俺にこの中に入れつて言うのか？  
いくらハーネスがないからつてそりゃないだろ？！ なあおい、考  
え直せよ！ こんな狭くて暗い所にいたら気が狂つちまうつて！  
なあつ！！

待て、待てつてば！！ 話せば分かる、話せば分かるつてッ！！  
だから離してくれ！ 僕をこのまま家に置いて行ってくれ！！  
留守番をさせてくれ！！！

はーなーしーてーくーれえええええつ。

……死ぬかと思った、マジで。

狭いのも暗いのも想像した通りだったが、それ以外にも大きな問題が二つあつた。

まず一つ、暑い。

季節は夏だ。ただでさえ俺は毛が長く、人間が毛皮のコートを着

ているようなくらいに暑い。それに狭くて通気性の少ない箱の中だときたもんだ。地球温暖化が進んでもう少し気温が上がっていたら、俺はぼっくりと逝つてしまつていただろ。」

もう一つは、空氣。

狭くて暗くて暑くて、おまけに空氣が少ない。バスケットに入れられたものの数分で息が苦しくなつた。空氣を求めて情報の僅かに漏れる光に向かつて足を伸ばしても届かず、箱の木地は厚く、猫の爪では頑張つても空氣穴を開ける事は出来なかつた。

結果、このザマだ。俺はやつと外に出て、だらしなくのびてゐる。

「ゴメンね、ホントにゴメン！！」

さつきからそいつが謝つてゐるが、俺は聞こえないフリをしていた。一々返事をしてやる氣力すらなかつたし、それが怒りの態度である事を表していたからだ。

通りの裏、俺たちはそこにいた。陰のある場所で一休みしようと いう事だが、俺の場合“一休み”じゃ済まなさそうだ。そいつが俺 猫なんかにペコペコと頭を下げ続けてゐる。他の人間が見たら（そこにはいなかつたが）変な顔をし、変なヤツだなと思うだろ。

「今度から氣を付けるからさ、許してくれよ」

今後……つて、次はどうするつもりだ？ ハーネスでも付けるのか、それとも通気性の良いバスケットを買うのか？ 想像以上に、高い買い物だと思つぜ、どっちも。

俺はいい加減ぎこちない足で起き上がると、「大丈夫だ」と鳴いてやつた。勿論、大丈夫なんかじゃない。本音は「気分が悪くて死にそうだ。家に帰つて炬燵布団の上に丸まつて眠りたい」だ。

「そつかア、良かつた」……

そいつは良く俺の言ひ猫語を理解してくれる。そいつの前世が猫だつたんじやないかと疑う程だ。

「じゃあ、今度は炎天下に出るけど、いいかい？」

いいとも。ただし、ちゃんと影を作ってくれよな。

「うん。ちゃんと冷たい飲み物は用意してるよ」

おや、上手く通じなかつたらしい。

別に訂正する理由もなかつたし、良い事を聞いたから何も言わず  
に俺はそいつの腕に抱えられ、表通りに出た。人通りがなかなか多い。建物の陰で何か販売している者もいる。多分、そいつもその一人になるだろ？

「よい、ショット」

そいつは道の隅の方に身体を寄せると、俺を地上に降ろした。そして自分も腰を降ろし、脇に挟んでいた封筒を手に持ち、開いた。中から取り出したのは、丁寧に描かれた俺の、黒猫の絵。俺も初めて見る物だつた。いつの間にこんな絵を描いたのだろう。その絵の中の俺は、どこか笑つていて見えた。猫が笑う仕草など、人間には分かり辛い筈なのに。

そして商売は始まつた……と思ひ。こいつ商売は売り手がもつと道行く人に声を掛けたりするものだらうが、そいつは通行人に見えるように絵を立てて置いてただけで、何一つ声を発さず、適当に目を泳がせていた。絵には何か小さな紙が取り付けられているが、俺は字が読めないから何と書いてあるかは分からぬ。恐らく、値札だと思ひ。値段はいくらだらう、と考えてみると、相当な貧乏生活

のために想像も出来ない。とにかく売るために値段は格安か、生活費を多く稼ぐために高いか。後者だと、俺は思う。

絵を売る商売はいわば副業だ。本業はフリーターで、時々アルバイトに行つてはよく肩を落として帰つて来る。そういう場合は、「クビになつた」か「不採用」のどちらかの可能性が高い（他の場合の例は「店長にしかられた」などだ。それくらいでがつかりするなよ、と本気で思う。とここんネガティブな奴だ）。そいつは職を転々としていた。同じアルバイトなど、長く続いて一ヶ月程度だ。それでも家賃を払える程度の金は稼いでいる……らしい。

とまあそんなこんなで、既に一時間は経過しようとしていた。通行人は絵などに目もくれなかつた。俺はそいつが持つて来てくれていた猫用の乾燥食品をぽりぽりと噉み砕きながら、ひそかに憤怒に燃えていた。らしくないと言えば、らしくないが。

「売れないと……。やっぱり一枚千円つて高過ぎるのかな？」

「うなんじやない？ けど、通行人は絵に見向きもしてないんだぜ。」

「僕、才能ないのかなア……」

そう落ち込まれても困る。かと言つて、俺じや大して励ます事も出来ない。

とりあえず俺はそいつの肩に飛び乗ると、そいつの頬を軽く舐めてやつた。一応、励ましているつもりだ。

「フフフ、大丈夫だよ。心配掛ける事を言つて「ゴメン」

なら最初から言わないで欲しい おつと。

落ち込んでる場合じやないぜ。ほら、お密さん第一号だ。シケた

顔してないで、愛想笑いしろよ。

「……君が描いたのかね？」

老紳士風の男が、一枚の絵をじっくりと見ていた。眉間に皺を寄せ、難しい顔をしている。彼の次の言葉は、「上手」「下手」のどちらだらう。前者である事を、俺は心底願つた。

「あ、はい。モデルは見ての通り、コイツです」

そいつが俺をその腕に抱き上げながら、老紳士に向けて笑みを浮かべた。が、彼はそんなそいつを見よつともしないで、絵を眺めていた。

そいつが息を呑む。俺も緊張してそのまま老紳士を見上げていた。そして、ゆっくりと口を開いた。

「素晴らしい……。君の描いた絵には、人を惹きつけようつな“力”がある

「あ、ありがとうございます！」

……“力”ねえ。

本当にそんな“力”があるんだつたら、たつた五枚の絵なんてすぐに戸切りれると思つんですが。

「五枚全部、頂きたい。代金は一万円出そつ

「あ……いえ」

老紳士が財布に手を伸ばした時、そいつが少し慌てたようにその手を止めた。

「申し訳ないのですが、御代は普通で結構ですので、一枚だけにしてもらえませんか？」

「ほ、ひしてだね？」

……何を言つてゐるんだお前、と俺は思わず叫んでしまつた。本当にやう思つたのだ。

アンタの絵を買ってくれる人なんて、もしかしたらこの人しかいないかも知れないんだぜ！ 金が少しでも欲しいんじゃなかつたのかよつ！ 一万円出すつて言つてゐるんだ、お言葉に甘えて一万円で五枚全部売つてやれよッ！

「上手くは言えないのですが、もしかしたらあなたその他にもこの絵が欲しいという人が、後から来るかもしません。僕は自分の絵を出来るだけ多くの人に見てもらいたいんです」

よく分からん。なんとなく言いたい事は分かるが、本当に上手く言えない。

「……ふむ、それならば仕方あるまい。では、この絵を頂こう」「ありがとうございます。千円になります」

俺はもう何も言わなかつた。そいつの好きにすればいい、と思つた。よくよく考えれば俺が口出し出来る事ではなかつた。

老紳士が選んだのは、俺も一番出来が良いと思つた、笑みを浮かべているような黒猫の絵だつた。丁寧に放送されたその絵を持った老紳士がどんどんと離れ、小さくなつて行く。  
どこか、寂しかつた。俺が描いた絵じやないが、どうこう訳か、寂しい感じがした。

その日は結局、その老紳士以外、誰もそいつの絵は買わなか

つ  
た。

## 第四部 秋 「絵描きのワケ」

### 4・秋 「絵描きのワケ」

そろそろ冷たい風が吹いてくるなど、俺は窓から紅くなりかけている山を見ていた。

秋は好きだ。暑過ぎる事もなく、寒過ぎる事もない。どちらかと言えば寒いのだろうが、自分の長い毛のおかげである程度の寒さなんてへっちゃらだ。 つと、俺も随分と言葉遣いが変わったモンだ。“へっちゃら”じゃなく、“平氣”だろ。……あいつの悪影響かな。

俺は今、留守番をしている。勿論、家にいるだけで何もしていない。ただ、炬燵布団の上でじろじろしていた。留守番がしつかり出来る猫がいるなら、是非会ってみたい。

あいつは今アルバイトに出かけている。初めての仕事だと言つてたが……こんなに朝早くに家を出るなんてどんな仕事なのだろう。時刻は4時を少し回ったところ。昼くらいには帰つて来ると言つてたから  そうか、新聞配達の類だな。

何故猫の俺が色々な事を知つているのかと疑問を持つかも知れないが、別に不思議じやない。野良猫だった頃、喰う物を探すために色々な家の屋根裏にもぐりこんでいた事も、何処かの工場にも住み着いていた事もあったからだ。おかげで色々と興味深い事を覚える事が出来た（と言つても人間の事だから無駄知識に近いのだが）。

さて、これから俺は何をするかな。

少し考えては見たものの、何もする事もないし、ましてや出来る事もない。

俺は仕方なく、炬燵の中に潜り込んだ。

ガチャヤ、と部屋の扉が開かれた音が聞こえた。

あいつが帰つて來た。いつもなら「ただいま」と言うのだが、またまた落ち込んでいるらしく、そのままのそのそと歩いて來た。

俺はとりあえず「何処に行つたんだ」と搜されないように炬燵の外へ出ると、そのまま布団の上で丸くなつた。いつものパターンだとすれば、もうすぐ「ホーリィナイトオ～……」と今にも泣き出しそうな声がするはず。

「ホーリィナイトオ～……」

そら來た。

「またバイトをクビにされたよう

はいはい、今度は何をしたんだ？

「新聞の束を溝に落つことしただけなのに、『お前なんでもうクビだーつ！』って」

……そりゃ仕方ないだろ。

じついう時の俺の仕事は、そいつの好きなよつとさせてやる事、かな。そいつは俺を捕まえると、頬ずりしたり、たぷたぷした首を触つたりする。多少我慢ならない所があるが、それを我慢するのが男つてモンだ。

「しかも何にも役に立つてないからって、バイト代を一銭もくれなかつたんだ」

それも仕方ない、潔く諦めろって。

しかし……あんたも随分とマヌケなんだな。これで何度目だ?

バイトがクビになるの。

「あ～あ……こんな事なら家を飛び出すんじゃなかつたな

お?

「僕の実家、畳屋をやっててね。高校を卒業したら僕がその家業を継ぐ事になつてたんだ。だけど、それには僕の夢 絵描きになるつて事を諦めなきやならなかつたんだ。……嫌だった。『自分の人生だから、自分で決める』つて格好つけて家を飛び出したのも、二年前くらいの事。もし、僕が家業を継いでいたら、夢を諦められたら、ひもじい思いをせずに良かつたのかな」

“もしも”なんて考えてたらキリがないぜ。

「……これで良かつたのかな？ 僕の人生

これはあんたが選んだ道。俺がどういいつつ権利もないし、言つたところで伝わらない。

だけどせ、まだその取り返しは付くんじゃないか？ 今からでも、実家に帰つて両親に一言謝れば、許してくれるかもしれないぜ？

「 彼女、どうしてるだろ？」

それはあんたの恋人を指すのか、それとも他の女性を指すのか、どっちだ？

「僕の恋人……だった人。今は違うよ、多分」

その多分ってどういう意味だよ。

などと色々、そいつの言葉の跡に反応して鳴いたりしたが、そいつは俺の言葉など聞いていなかつた。ただ坦々と、遠い目で、独り言のように呟いていた。

やがてそいつの手から解放された俺は、そいつの目を見た。一粒の涙が、零れ落ちていた。

その涙が誰のためのものだったのか、無論、俺には知る由もなかつた。

5・一度田の冬（前編）「最期の頼み」

雪が降っていた。あの日と同じように。

俺は炬燵布団の上でじろじろとしたまま、窓の外の雪を眺めていた。さつき降り出したばかりだが、もう木の枝や葉が白色の染め上げられている。今年の雪も積もりそうだ。

一年。あいつと初めて会った日から、早くも一年の歳月が過ぎ去るとしている。時が経つのは本当にあつという間だった。今でもまるで昨日の出来事のように、鮮明にあの日の事が思い出せる。冬は嫌いだ。俺はそう心の中で呟くと、布団の上で更に丸まつた。寒くて、冷たくて、そして寂しい冬。

だけど今年は、炬燵の中ですつと丸まつていられる（とは言つても電気が止められていて暖房器具としての役割は果たしていないが）。悪いけど、冷たいけど、主に外で生活していた野良の時よりずっとマシだ。それにあいつがいてくれるから、寂しくもない。いや、あいつがいるだけで、冬でも暖かく感じる。

「うわあ、寒い寒いっ！」

そう言ってそいつは部屋に駆け込むや否や、まっすぐに炬燵の中に足を突っ込んだ。しかし悲しいかな、その中は外の温度と大差はない。

「うー……。ホーリーナイト、寒くないの？」

そりや寒いわ。出来れば炬燵の電源を入れて欲しい なんてな。  
そいつは丸まっている俺を見て、クスッと笑った。

「あ、今あつたかい炬燵の中で丸くなりたいって思った？」

お、いつになく鋭いな。

「ハハ、図星つて感じだね」

そいつは再び笑った。俺も愛想笑いのつもりで、一声鳴いた。

楽しく、暖かかった日々が突然崩れ去った。

俺が玄関先で用を足した後、部屋に戻つて再び炬燵布団の上で丸くなろうとした時、何かが倒れる大きな音がした。嫌な、予感がした。

俺はすぐさま音のした方へ駆けた。小さな台所の前で、そいつが倒れているのを見た。

勢い良くそいつの身体に飛び乗り、そいつの頬を舐めた。反応はない。

「冗談じゃない。ただの貧血なのか、それとも……とにかく、俺はそいつが何か反応するまで頬を舐め続けた。

数分経過した頃だろうか、そいつが唸り声を上げながらゆっくりと目を開いた。状況が理解出来ないという感じで、虚ろな目で俺を見た。

「あれ……？」

惚けた声を出すな。本当に心配したんだ。

「ん……ああ、ゴメンね。何か心配掛けちゃったみたいで。僕は大丈夫だよ。布団の中でゆっくり眠つてれば、すぐ治るよ……」

俺はどうするか悩んだ。恐らく、そいつは貧血の類なんじゃない。医者にいやんと診てもらつべき、何かしらの病気だ。だが、病院に行く金なんてないし、それより病院へ行く手段もなかつた。このアパートから病院までの距離はざつと10kmくらい。どうやってそいつを病院まで運ぶのか……猫の俺には所詮無理な話だ。せめて俺が人間だつたならば。

“たら”“れば”は置いといて、他に方法がないのなら、俺がやるしかない。

しかし、この俺に何が出来る? “悪魔の使者”である黒猫一匹、一体何が出来る?

それでも、やるしかないんだ、俺が。

俺はその場に居ても立つてもいられず、玄関の扉の下に付いている猫用の扉を通つて外に出た。真っ白な銀世界が広がつていた。

……さて、行くか。

俺は、雪が降り注ぐ中を駆け抜けた。

部屋に戻つた時には、俺は傷だらけだつた。

久しぶりに痛みを味わつたが、やはりまだ慣れててしまつているようだ。前足から流れ出ている血を見ても、何とも感じない。

俺はまず薬屋に行つた。いや、襲つたと言つべきか。病院に行

つても医者を呼べやしないし、薬を奪取する事も難しい。薬屋なら棚に堂々と置いてある。どうぞ取つて行つてくださいとばかりに。

盗みは昔からしょっちゅうやってたから手際が良かつた。客がレジの店員から受け取つた薬の入つたビニール袋を奪つた。とても褒められるやり方ではない。その客の顔にいきなり飛び掛り、自慢の爪で引っ搔いてやつた。怯んだその一瞬の隙を突いて、俺はまんまと薬を手に入れた。が、世の中そんなに甘くはない。店を出た直後、俺は後ろから投げられた石をぶつけられた。俺はその痛みを我慢した。我慢しなければならなかつた。

俺はビニール袋を口に提げたまま、走つた。そして八百屋の前で立ち止まると、再び犯行に及んだ。店員の死角に忍び込むと、ビニール袋を一旦地面に置き、台に堂々と並べてある食料を袋の方に落とす。それを器用に袋に入れ、そしてそそくさと店員に気付かれないよう走つた。多分、これまでやつてきた盗みの中で、一番手際が良かつたんじやないかと思つ。

そして、帰路で子供達に意思を投げられまくつて、今に至る。

俺は真つ直ぐにあいつの元へと向かつた。汚れた足跡には血も付いている。掃除が大変だと言つていつもなら怒られるが、今は別だ。掃除なら、後でちゃんと俺がしといてやる。

布団の中に、そいつはいなかつた。そいつは、椅子に座つて机に向かつっていた。

ブチッと音がして、ボロボロになつたビニール袋が破けて中に入つていた物が盛大に床の上に転げた。そいつは今まで俺に気付いていなかつたらしく、その音に一瞬びくつと身体を震わせた後、ゆっくりと俺に向き直つた。酷く、顔色が悪い。

「 傷だらけだね。初めて出会つた時と同じだ……」

何してゐ。『ゆつくり休めよ』と、そつとつただろ。

俺は半ば怒りに満ちていた。それは、そいつにどつても同じ事だつたのかもしない。俺が盗みを働いてきた事は、ビニール袋から転げた物を見れば一目瞭然。悪い事はやってはいけないと、そいつは良く言っていた。

「これで……おあいこだよ」

そいつは俺を見て、ニッヒと力なく笑った。そして椅子からゆっくりと立ち上がると、俺に向かつて歩み寄る。覚束ない足取りで、何度も身体が倒れそうになる。それでもそいつは、俺の事をしつかりと見つめていた。

「……たつた今、書き終えたんだ、この手紙」

そいつは俺の田の前に、一通の手紙を差し出した。

「……いつか、話したろ？　僕には恋人がいたつて。その恋人とはね、僕はろくに話もしないまま故郷を飛び出してきたんだ。もしかしたら、って思つんだよ。彼女はまだ、僕を想つてくれてるのかなあ……つて。……そんな彼女に宛てた手紙なんだよ、コレは」

「……だから、何だよ。」

「……コレを、彼女に届けてやつて欲しいんだ。僕の故郷は、ここからかなり離れてるけど、ホーリーナイト……お前なら僕の頼みを聞いてくれるよね」

どうしてそんな頼み事をするんだ。そんなの、あんたが元気になつてから直接渡してやればいいじゃないか。普通に郵便で出せばいいじゃないか……あつ！

そいつは哀しげな表情を浮かべたまま、手紙を俺に差し出したまま動かなかつた。

その瞬間、俺はそいつの気持ちを悟つた。自分がもう長くないつて事に、自分で気がついたんだ。自分が死ぬその様を俺に見られたくない。そして、また俺が一人ぼっちになるのを哀れに思つたんだな。

バカな奴だ。俺の心配なんていいから、自分の心配をしろよ。

「……頼むよ」

俺はその手紙をそつと口で銜えた。そいつがまた力なく、けれども嬉しそうに笑う。

不吉な黒猫の絵なんて売れなかつたのに、それでもあんたは俺だけ描いた。俺のためが故に、あんたは酷く痩せ細り、辛い病氣に掛かつてしまつた。

そんな俺があんたに恩を返せるとしたら、コレしかない。もっと違う形で恩を返したかつたが、それは叶わないようだ。

俺は前足で盗んで来た食料や薬を差し、催促してやつた。そいつはただ一度、小さく頷いた。

俺はそいつにゆつくりと背を向けた。そして、一声、大きく鳴いた。

手紙は確かに受け取つた　　と。

6・一度田の冬（後編）「この日のために」

雪が降る山道を、俺は駆け続けていた。

『一度山を越えた所にある小さな村の、青い屋根の家』とあいつは言つていたが、何が何でも説明不足だ、と今になつて想う。だからと言つて詳しい説明を聞くために元来た道を戻ろうとは思わないが、多少なり不安だ。

どれくらい走つただろう。疲労のせいで時々目が霞み、立ち止まつて休みたくもなる。

だが、俺は立ち止まらなかつた。立ち止まりたくなかった。あいつは今、瀕死の状態だ。そんなあいつを救つてやるには、俺がこの口に銜えている手紙を一刻も早くあいつの恋人の元へ運ぶしかない。後はその恋人が、俺を“悪魔の使者”と見るか否かだ。

「見ろよ、『悪魔の使者』だ」

「目障りなんだよなあ、シツシツ」

そう言つて、二人組みの子供が同時に石を投げて來た。回避する事に体力を使いたくなかったが、そんな事に關係なく、俺の身体は避ける事もしなかつた。一発、後頭部に直撃し、一瞬視界がブラックアウトする。それでも俺は走り続けた。

好きなだけ罵声を吐けよ。好きなように呼べよ。……俺には、あいつの付けてくれた大切な名前があるから。

“ホーリーナイト”

“聖なる夜”とあいつは俺の事を呼んでくれた。

優しさだつて温もりだつて……みんな詰め込んで呼んでくれた。他人にとつては意地汚い黒猫でも、“悪魔の使者”であろうとも、あいつにとつて俺は“聖なる夜” “ホーリーナイト”なんだ。俺が俺である意味なんて、俺がこの世に存在する意味なんて、それで充分なんだ。

もしも、生まれてからずっと世間に恵み嫌われてきた俺に生きている意味があるとすれば、恐らく、この日のために俺は生まれて来たんだと思う。今なら本氣で、そう思える。

どこまでも どこまでだつて……走つて見せた。  
俺は、心臓がズキズキと痛むのも無視して、更にスピードを上げた。

突然の不意打ちに、俺は何もする事が出来なかつた。

もう少し早くに危険を感知するべきだつた。視界に手に何かを持つた人間が映つたその瞬間に、その手に持つていた物が何かを、悟るべきだつた。

鋭い音と共に、一発のBB弾が俺の左目を奪つた。一瞬左目に映つたのは赤色だけで、すぐに何も映らなくなつた。今まで味わつた事のない、激痛だつた。

「よつしや、命中つ！」

「さすがだな。けど、少し可哀相じやないか？ こんなトコ警察にでも見付かつたら、動物虐待で捕まるぜ」

「何言つてんだ、見つかりやしないさ。それに相手は“悪魔の使者

”なんだぜ？ 動物以下の存在だ』

「……それもそうか」

「フン、結構威力の高いエアガンだろ？ アルニ缶程度なら撃ち抜ける、俺特製のエアガンだぜ」

何か生暖かい液体が、左頬を伝う感覚が何とも気持ちが悪かつた。エアガンを持つた男なんて無視したかった。そのまますんなりと道を通して欲しかつたが、それは叶わぬ願いだつた。

俺が再び走り出す前に、そいつらが俺を取り囮んだ。ガシャン、と何か音が上から聞こえた。弾をリロードする音だという事に気付いたのは、もう一発。今度は額に喰らつてからだつた。近距離からの発砲は、それだけで皮膚が弾けるのではないかという錯覚をさせる。

「……もつ少し遊んでやるか？」

「鬻り殺すに一票」

「いや、ここはもつ逃がしてやつたら

「お前は黙つてろ」

そのグループにも一人、少しあは良い奴がいるようだが、恐らく俺を助けてはくれないだろう。

エアガンで撃たれ、蹴られ、そして踏まれて揉みくぢやにされて……。それでも俺は口に銜えた手紙を離さなかつた。その手紙を離してしまつたら、あいつを裏切つてしまつようのような気がしたからだ。裏切りたくない、俺はこれからもずっと、あいつと“親友”でいたかつた。

やがて攻撃が止んだ。薄つすらと開けた目に映つたのは、近付いてくる男の手だつた。

「コイツ、手紙なんて銜えてやがる」

親友との約束を、奪われるワケにはいかない。

俺は力を振り絞って起き上ると、近付いてきていた手に飛び乗  
り、続け様にその男の顔まで飛んだ。そして一度とその傷跡が消え  
ないようになると、そいつの顔を力一杯引っ搔いた。皮膚ビックリか肉ま  
でも切り裂く嫌な感覚が爪を伝つ。

「ぎゃああああつーーー？」

品のない悲鳴だ、と引っ搔いた男を見ながら思った。

俺はそのまま着地すると、全身を駆け巡る激痛を我慢し、逃げる  
よつに走り出した。口に手紙を銜えたままだ。痛みを我慢する時に  
歯を強く食い縛つたから、もしかしたら手紙に俺の歯型がくつきり  
と付いてしまつたのかもしれない。けどまあ、読めたら良いよな？  
あいつらは追つて来なかつた。わざわざ追い駆けてまで俺と“遊  
び”たくはなかつたようだ。俺にしてみればラッキーだ。

俺はもう後ろを振り返らないようにして、先を急ぐ事にした。

山頂の付近、下が見下ろせる場所で俺は一旦立ち止まつた。  
村が見えた。小さな村だ。右田を凝らしてよく見ると、奥の方に  
一軒だけ、青い屋根の家があつた。そこが多分、あいつの恋人の家  
だ。

もう少しだ。もう少しで、約束を果たせるんだ。

横には村へと続く長い峠道があつたのだが、俺は最短ルートを辿  
る事にした。山を、急な斜面を駆け下りるルートだ。道なんて呼べ  
るものじやない。遠回りする体力がなかつたのが、一つの理由だ。

俺は半ば滑り落ちるようにして斜面を駆け下りた。立ちはだかる木々に何度もぶつかつた。足を木の根に取られて、最後は転げ落ちた。全身ズタボロだつたが、何とも村に辿り着いた。

既に満身創痍の俺は、手紙を銜えて歩くだけで精一杯だつた。一歩、そしてまた一步踏み出す度に、身体のどこから流れ出る血が落ちる音が聞こえた。どこから流れ出る血なのか確認するために身体をくねらせたり、捻つたりも出来ない程、俺の体力は限界に近付いてきていた。ただ歩く。それしか出来なかつた。

小さな村とは言え、人が全くいない訳ではない。さつきから何人も擦れ違ひ様に俺を見ては眉を顰めている。それでも攻撃を加えるつもりはなかつたようだ。……少なくとも、擦れ違つた大人たちは。

「……小汚い黒猫め、そんな血だらけでこの村に何しに来た！」

「お前の血でこの村の地を汚すんじゃないっ！」

「“悪魔の使者”め！」

「」の村から消え失せろ……！」

子供の数は、五、六人だろうか。正確な数の確認が出来ない程に、俺の右目に映る物全ては霞んでいた。

立ち上がる間もなく襲い来る罵声と暴力は、躊躇なく俺の命を削つていく。

どうして、黒猫は忌み嫌われるんだろう。

どうして、俺はこんな目に遭わなきやならないんだろう。

どうして、俺は黒猫なんだろう。

……その疑問に答えてくれる者は、誰もいない。

「死ねよつ！」

右目に、銀色に光る何かを振り上げた子供が映った。……ナイフのようない物だつた。

「ここまでなのか？　俺があいつのために出来る事は、たつたここまで事なのか？

畜生、と鳴いたつもりが、上手く鳴き声にならずに唸り声のまま風に流されて消える。

……「メン。俺、どうやら約束、……果たせそうにない。

死を覚悟した、その瞬間。

「止めなさい……！」

若い女の声がした。俺にしてみれば、それは天使の声だった。

「あなた達、命を何だと思つてんのよつ……！」

「げ、五月蠅い奴が出て來たぜ！」

「コイツは黒猫だぜ？　“悪魔の使者”なんだぜ？　……殺して何が悪い？」

「私から見ればあなた達こそ“悪魔”よ……！　寄つて集つて、罪のない黒猫を虐めて……！」

「罪のない、だと？　そいつは生まれたその時から　」

「この子が好きで黒猫に生まれたと思つてんのなら大間違いよつ……！　とにかく……これ以上この子を虐めるつもりなら……つ……！」

「……チツ」

状況が良く分からないが、俺の耳に聞こえたのは毒気吐きながら遠ざかっていく黒猫の足音。どうやら、俺は命拾いをしたらし

い。

若い女が俺を抱き抱えた。そして優しく、俺の頬を擦つた。

「すぐに病院に連れて行つてあげるからね」

それを聞いて俺は安堵したのか、俺の意識は女が俺を抱えて走り出した所で途切れた。

## 第七部 一度田の春 「Hōtō Kōhō no Natsu」

### 7. 一度田の春 「Hōtō Kōhō no Natsu」

車のエンジン音に、俺は目が覚めた。

……相変わらず状況が理解出来なかつた。俺は自動車の助手席に乗せられていて、運転席には若い女の姿が見える。左目には何も見えず、どうやら本当につぶれてしまつたようだ。他の傷はと言つて、まるでミイラのように全身が包帯でぐるぐる巻きにされている。応急処置なのか、それとも獣医の手当てなのか、動物病院に行つた事のない俺には分からなかつた。

どうやら俺は生きているらしい。何とも、実感が沸かないが。なああんた、少し状況を説明してくれないか？

「あ、良かつた。目が覚めたのね」

女は横目で俺を見ると、ホッとしたように息を吐いた。

「お腹空いたでしょ？」

と、彼女は車を一旦停車させ、後部座席に置いてあつた紙袋から箱を取り出した。パッケージには綺麗な毛並の雌猫と乾燥食料の写真が印刷されている。“キャットフード”と呼ばれる食料である事は、あいつから教えてもらつていい……？

俺はハツと気が付いた。というより思い出した。

……一刻も早く例の手紙をあいつの恋人の元へと届けなければならなかつたんだ！

その前に、手紙は何処へ行つたんだ…？

「そんなに鳴かないでよ。君の持つてた手紙なら、ちゃんと受け取つたからね」

は？

「宛名が私だつたから、勝手に読んじやつた」

彼女は箱から食料を取り出す手を止めると、自分の胸ポケットに入れていた手紙を手に取り、俺に広げて見せた。俺の歯型もくつきりと残つてゐる。確かに、それはあいつの手紙だつた。

宛名が私だつたつて……あんたが、あいつの？

……偶然つてあるモンなんだな。いや、運命か？ まあ、偶然と運命の境は微妙なのらしげが。

「ねえ」

彼女が目に薄つすらと涙を浮かべながら、俺の目の前に乾燥食料を入れた容器を置いた。

「 あの人……死んじやつたの？」

俺は、その問い合わせに答えなかつた。答えられなかつた。

あいつが何か重い病気に掛かつたという所までしか、俺には分からぬ。今生きてゐるのかも、そして死んでいるのかも、分からぬ。ただ、あいつはそう感嘆には死ないと信じていた。数年間、栄養失調の貧乏暮らしをしていたんだ。そう簡単に、死ぬ訳がない。あいつがその手紙に何を書き、何を彼女に伝えたかなんて知らない。知る由もない。

俺はとにかく、空腹を満たすために食料の入つた容器に頭を突つ

込んだ。

「……そっか、君も知らないんだね。じゃあ、一緒に行こうか。あ  
の人の所に」

そう言つと、彼女は再び車のエンジンを掛けた。

「あ、ええと何でゆーか……その……ゴメンナサイ」

そいつは病室のベッドの上で正座し、深々と俺と彼女に向かって頭を下げる。

ここまでの経緯を簡単に話すと、俺と彼女はあいつの住んでいたアパートへ行つた。が、部屋は綺麗にもぬけの殻で、もう葬儀が終わつたのかというくらいに（少なくとも俺は本気でそう思った）片付いていた。出しつばなしだった炬燵布団もなかつたし、あいつの持つていたスケッチブックもなかつたからだ。

しかし、大家に改めて話を聞いたところ、危険な状態だった所を訪ねて来た一人の老紳士に発見され、あいつは病院に運び込まれたらしい。そこで俺と彼女は同時に安堵した。

それで、栄養満点（？）の点滴を受け、病人食もきつちり摂つて元気になつた状態が、今だ。見る限りぴんぴんしている。顔色も、今まで見た事もないくらいに良かつた。

頭を下げるまま動こうとしないそいつに、彼女はゆっくりと近付くと顔を上げさせる。そして二人の目と目が合つた瞬間、彼女がそいつの胸に飛び込んだ。

「良かつた……ホントに……つー……あなたが手紙で変な事書くから、心配したじゃない！」

「「ゴメン、悪かったよ。けどさ、僕も本当に危なかつたそんなんだよ。僕が今こうして生きていられるのは、運が良かつた。じやなくて、先生のおかげさ」

「お医者さんね。私からもお礼言わなくけや」

「いや、その先生じゃないんだよ。確かに直接助けてくれたのはその先生なんだけね」

「じゃあ、あなたを病院まで運んでくれた、老紳士の事？」

「そうそう」

「その人が、何で先生？」

そいつは嬉しそうに笑いながら、彼女を自分の胸から離した。

「それがさ、その老紳士……プロの絵描きだつたんだよ。一度僕の絵を買つてくれた人でさ、もう一度僕に会いたいって街を捲し歩いてたらしいんだ。それで何とかして僕の住所を突き止めて、中に入つてみたら　　つて感じで」

そいつはまた、嘘のよつた奇跡の話だ。

「その人、僕の絵の才能を高く買つてくれてね。『もし良かつたら私の下で絵を描かないか？　勿論、生活費などは私が援助するよ』って言つてくれたんだ」

「それじゃ

「おつと、喜ぶのはまだ早いよ。先生、僕から買つた絵を勝手に何かの「ンクールに出したんだ。それがなんと、見事に入賞！　ほらっ！」

そいつはテーブルにおいていた雑誌の切抜きを彼女に見せた。俺

も見たが、何が書かれているのかは字が読めない俺には全く分からなかつた。が、小さく黒猫の俺の絵が、写真に映つていた。

「その賞金は当然、この入院費に当てられる事になつたんだけどね

そいつは苦笑して頭を搔いた。

「ま、ちょっと変な形になつちやつたけど、ようやく僕の夢は叶つたんだ。子供の頃からずっと夢見てきた、絵描きになるつて夢が……」

「……おめでとう」

「ありがとう。これも全て、僕の我儘を聞いてくれた君のおかげだ……」

二人が目を閉じ、お互い顔を近づける。これはもしかしてすっかり存在を忘れられてる俺は、勿論不満だった。だから、邪魔してやつた。

フ といふのは相手を威嚇する時などに良く使う。だからこの場合では少々使いどころが間違つてゐる気がしたから、俺の存在を思い出させてやるといつ意味で、盛大に喉を『じろじろ』と鳴らした。唇と唇がもう少しどつて所で、一人が同時にビクッとして俺の方を見る。

「……『メン』『メン』、君の事すっかり忘れてた」

彼女が笑う。

「……この傷、どうしたんだ？」

何を今更。

「あなたが無茶をせるからよ。あのアパートから私の家まで走らせてうんて。子供達に虐められてるといひを私が助けなきや、今頃どうなつてたか……」

「……ゴメン、本当にゴメンね、”ホーリーナイト”。でも、”聖なる騎士”である君ならやつてくれる信じてたんだ」

「騎士？」

……騎士？

「あれ？ 手紙に書いてなかつたつけ？ ”ホーリーナイト”の意味は”聖なる騎士”だつて」

「そつだつけ。手紙には『クリスマスの夜に出会つたから』とか書いてあつたから、てつきり”聖なる夜”の方なのかと」

「”聖なる夜”つて、普通に考えたら妙な名前だなつて思わなかつた？」

「一体何の話をしてるんだ？ 僕の名前 ”ホーリーナイト”つて、ホントはどういう意味なんだよ。

俺はついに、教えてくれーつ、と鳴いてしまつた。

「“k”だね」「“k”よね」

一人同時に言い、同時に笑つた。

ますます意味が分からない。さっぱりだ。おい、ちゃんと教えてくれよ、なあ！

俺はそいつのベッドの上に飛び乗ると、そのまま丸くなり、尻尾を振つた。

季節は春。

桜の花びらが舞い、つくしが顔を出し、そして何より暖かい春。  
俺はそんなこの季節を、前よりほんのちょびつだけ、好きにな  
つた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9024m/>

---

k

2011年10月7日15時19分発行